

驚愕の母

電車が着いたようだった。少しすると改札から人の波が押し寄せてきた。もうすぐ母がその中から出てくるはずだった。

俺は十五分前から改札が見えるところに立ち、母を待っていた。

自宅のアパートはここから歩いて五分という好立地で、母が電車に乗ったとLINEで報告があつてから部屋を出てきた。それでも十分に間に合う距離なのだ。

母から突然連絡があつたのは一か月前だった。バイトが終わり、アパートに帰ったところで携帯が鳴った。

母だとわかったので携帯に出てみると、「東京へ遊びに来る」と言うのだ。なんでも、しばらく会ってない息子の様子を見るのが目的らしかった。

俺はウザいと思ったが、母は「そういうことだから、よろしくね」と言
って電話を切ってしまった。何も言い返すことが出来ずに決められてしま
ったのだ。

母が来ると何かと小言を言われてうるさいので俺は鬱陶しかった。「ちゃ
んと食べているのか」とか「いい加減就職しなさい」とか「たまには帰っ
て来なさい」等々。毎回同じことばかり言ってくる。

バイトが休めないと言って、体よく断ろうと思ったが、一か月後だと、
まだシフトが決まっていない。休みを取ろうと思えば取れる状態だったの
だ。

母もそれをわかっていて、ひと月前に連絡してきたのだろう。あざとい

母だった。今回ばかりは逃げられそうになく、また無下に断るのも忍びないと思ったのだ。

母とはしばらく会っていないので、「まあいいか」と思い、俺は渋々承諾したのだった。いや、承諾というより、強引に押し切られた感じだ。バイト先には三日間休みを取って、シフトを出しておいた。

実家へ帰ると鬱陶しいので、俺はここ三年ほど、盆も正月も帰っていない。最後に帰ったのは父の葬儀のときだった。それすら出たくないと思ったが、さすがに父が亡くなり、葬儀に出ないわけにはいかない。バイトを休んで葬儀に出たわけだが、母とはそれ以来会っていないかった。

「たまには帰ってきなさい」と口癖のようにLINEを送ってきたり、電話で直接言ってきたりしてたが、そのたびに俺は「そのうちね」とか「考えとく」とか言ってスルーしてきた。

しびれをきらした母は、自分から会いに来ようという強硬手段に出たようだった。母にしてみれば、息子と三年も会ってなければ、たまには会って話をしたいと思うのが親心だろう。俺もその気持ちは理解できたので、今回だけは母の言うことを聞いて、親孝行のつもりで会うことにしたのだ。三日間、母の小言を我慢すればいい。

改札の間から、ぞろぞろと人波が押し寄せてくる。その流れの中に母はいるはずだった。もちろん自分の親なので見ればわかる。

はずだったが……

そうではなかった。俺は母がこちらに歩いてくるのにまったく気づかなかったのだ。自分の記憶の中にある母の姿を探していたのだが、なかなか見つけることができなかった。

